

第4・5・6班合同研究会第2セッション概要

「秋田茂著『イギリス帝国とアジア国際秩序』を読む」

評者：宇山智彦（北大スラブ研究センター）、左近幸村（北大大学院博士課程）

日時：2009年3月3日（火）19時15分～20時45分

場所：ホテルKKR札幌 会議室「北斗」

企画のねらい：

第4班は、ユーラシアの個々の帝国を比較するとともに、それらを世界史・世界システムの文脈の中に置くという、2つの課題を持っている。本研究会では、イギリス帝国を中心にグローバルヒストリーの研究を進める秋田茂の著作を、他の帝国の研究者が読み解くことにより、2つの方向性を架橋することをめざした。

研究会での議論：

評者の左近と宇山による発表（レジュメ参照）に対し、著者の秋田は以下のように答えた。

- ・ この本（2003年刊行）を書いた時点ではグローバルヒストリーの研究を徹底してできておらず、この本の前半は今の自分が批判する一国史になってしまっている。
- ・ ウェスタン・インパクトを重視し過ぎではないかと左近は批判するが、そのような意図はない。ただ、西洋列強を抜きにしたアジアの経済発展を考えることはできない。イギリスが現地の経済をうまく利用し、アジア側もまた西洋の経済的圧力をうまく利用したことが重要である。
- ・ 東北アジアは、イギリスの自由貿易体制の中に入っていたが、自分としては具体像を描けない。東アジアでは上海に圧倒的に権益が集中していた。
- ・ 自由貿易体制と利益独占の併存はしばしばあった。ただ、イギリスが自国産業資本の利害より自由貿易を優先したことは確かである。これは、イギリスの借款と関係している。
- ・ 帝国主義論との関係（宇山の質問）についてだが、自分は帝国主義論に限られない帝国史をめざしている。ただ、イギリスによるインドの富の収奪なども意識しており、従来のナショナリスト史観に陥ることは避けつつも、究極的には帝国に批判的でありたい。
- ・ インドの現地語史料を使うことは自分には難しく、英語教育を受けたエリートのみを扱っている。

フロアからは、自由貿易と言ってもシティの利害が貫徹されることを前提としたものではないかという疑問、グローバルな挑戦に対するナショナルな枠組みでの反応も重視すべきだという意見、グローバルヒストリーという新たな「大きな物語」とローカルな研究を接合することの難しさや、列強・帝国間の利害調整がどうなされたかがアジア史（中国史）の側で

も研究されていないという指摘などが出された。

左近と宇山が、秋田が古い研究と位置づける本書前半部にむしろ興味を引かれたことに示されるように、個々の帝国の研究とグローバルヒストリーの間に一定のずれがあることは否定できない。しかし、帝国的・世界的なパワーと現地社会の相互作用を重視する流れや、ナショナルな枠組みも決して無意味ではないという認識が両者の間で共有されていることは本研究会の議論で確認でき、今後の共同研究を進めるための大きな手応えが得られた。

(文責：宇山)